佛諸

新選年浪發句集五編 5 乾

へ 5
5612
5

門へ5
號5612
卷 5

半日菴芳律編

俳諧 新選素浪發句集 乾坤 二冊

東京香同社藏梓

代々宗匠撰集する所の実に多し
あれども花の下密密にして
月の下毎毎に所の風俗を写
す毎に半日菴のわすれ草成
べし明治乃風潮を移すへき
句を花月に実入れる事と

[illegible]
歳くゝ世々[illegible]
風雅の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

序

[illegible]
[illegible]
何[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

明治廿九年九月

[illegible]

序二

例言

○本集編纂の趣意は初篇より續て記載したれ共今こゝに數年前の卷々を參照して知るべし

○課題を編を追て明らかに易きより難きに進みたり故に他者を句編選者も佳作を拾ふに苦しみしを去年より

○此編去年の句集に多くこゝに新に集めたるものゝなかに俳和字は無月孫を撰して他例を知るべし

○先例にならひて欧仙四卷を載せ又香比雅伯の新句をも追加して巻尾に句集を完結せり

○今此五篇完了に際し文字を訂し仮名を正すと雖も粗漏たるを免れあらむ看者寛容補ひ給へ

明治三十年盛夏　反古散人誌

○上の巻

元旦 一 三ヶ日 二 輪飾 三 楪 三 大服 四
稲積 四 初荷 五 福引 六 子日 七 小豆粥 七
初雷 八 浮沙 九 注の人る 九 春の霜 十 春雪 十
春日 十一 春の鐘 十一 西行忌 十二 鷺 十三 弥老松 十四
種蒔 十四 菜の花 十四 蒟蒻 十五 春野 十五 山焼 十六
蕨 十七 鶯合 十七 曲水 十八 鞦韆 十八 梅若忌 十九
寄花恋 十九 逍遥 廿 連翹 廿一 蓬隣 廿二 ○
綿抜 廿二 若楓 廿三 茂 廿三 芍薬 廿四 塩の子 廿四
行々子 廿五 隻書 廿六 楫香 廿六 菜日 廿七 懺 廿八
競馬 廿九 隻夜 廿九 火串 三十 小鰺 三十 胡瓜 卅
藤の花 卅一 紅の花 卅二 青鬼灯 卅二 紫蘇 卅三 凌霄 卅三
葛の花 卅三 風蘭 卅四 澤馬酔木 卅四 隻草 卅四 青嵐 卅五
水脊 卅六 新麦 卅六 製ならず 卅七 蟐 卅七 簟 卅七
祇園會 卅八 粽切 卅八 施米 卅九 雨乞 卅九 露涼 四十
秋近 四一 連句歌仙二巻

○下の巻

市衡萩 一 星月夜 一 秋日 二 秋夜 二 秋空 三
秋水 三 秋暑 四 後袷 四 木綿取 五 鹿笛 六
蟷郷 六 みのむし 七 冬瓜 七 鵯 八 稲雀 八
芒穂 八 崩簗 九 秋声 十 秋蔭 十 秋山 十一
秋海 十一 宵月神祇 十一 月の蝕 十一 秋彼岸 十二 芭蕉 十四
野菊 十五 紅葉 十五 榎の実 十五 後の雛 十六 雁為替 十七
秋深 十七 ○ 御取越 十八 御命講 十八 蕪 十八

于菜 九 冬の蠅 九 浮雲 廿 多吽 廿一 鷹 廿二
夜興引 廿三 罷 廿三 冬川 廿四 冬田 廿四 冬野 廿五
冬空 廿六 冬日和 廿六 枇杷の花 廿七 吹草祭 廿七 鍬鰊 廿八
牡蠣 廿九 鱈 廿九 桑 三十 枯芦 三十 冬の梅 卅一
寄写遠懐 卅一 雪折 卅二 餅花 卅三 古暦 卅四
年の夜 卅四 年の暮 卅五 罪交 卅六 連句歌仙 二巻

新選年浪發句集五編

半日庵芳緑選
芙蓉庵文禮校
一具庵身香閲

上の巻

元朝

元彩や机の上はすもう部屋　伊勢　耕雨

元朝や伸たゆるる松の新　羽後　月静

元朝の眼に新しや海と山　聽泉

元朝や きさらぎ初の霞ます　里山

元朝や 咲てのどけす皇國の　弄山

行くすゑ幾千年 元彩のかゝるかぶ　唯風

元朝や乳母をはなれていとう膳　羽前　加風
元朝や餅の餅も高ら紅来　陸奥　東曉
元朝や高き高き高き高き高き　信濃　逸水
元朝や富士の蒔絵の菓子盆　上毛　晴月
元朝や点ぜて立つ葉の煙り　一鼎
心喰元朝の外なかりけり　吾岳
元朝や忘れ忘れ旅ゆく　玉蕉
元朝や立ちたいもれぬ我心　下毛　機汀
元朝の姿よ富士ちらちら　伊豫　吳雪
元朝や井桁のうくみつまみ膳　空
元朝のちらちら近し神路山　吉窓
元朝やせもしきせのきぬ　相模　酔

元朝や貧か袴ゑ　むうとう膳　出羽　英仙
元朝や年の豊を空の色　紫山
元朝や口嘶く音も空を鏡　東京　紫雲
元朝や点ぜ点ぜ元朝の　丈芳
ちらちら紙ち仍く元朝の　等樣
元朝にはやそる仲の古帽子

三ヶ日

青蛙ハ冰も溶ぬ三ヶ日　相模　閑美
三ヶ日立ちや火鉢を去として　上毛　玉桂
浅戸の墨ちゆうしやう三ヶ日　松洲
子供等に凧の合ふや三ヶ日　吾岳
一日の如くに立ちけり三ヶ日　空

多く新のさゝぬ月ハ三ケ日　羽後　清真
強多り立つ日の早し　三ケ日　豊後　湛園
等の為に立て住舞ぬ三ケ日　長雪
三ケ日程よく拾ひ　逸水
はや立ちぬ笑ひ　東京　亀鶴
羽子板の裏すもたつや三ケ日　寸芳
三ケ日碁　雲峰
三ケ日立つやあるし　芳緑

羽子

羽子や撫　上毛　義琴
わすれの新らつり　近山
羽子や初なし　士行

羽子のすゝ　一鼎
門前の羽子　信濃　蓬殘
羽子や柳を　相模　一和
羽子の眼立つ　羽後　梧風
羽子や黄ゝて撫　為勝
羽子を撫てゝ　雀堂
羽子や大和さゝろ　春山
羽子の目立つや　上総　雙松
矢稗に羽子　為晩
羽子も等閑ハ　東京　ゝ
羽子の大目立つ　寸芳
羽子立の車に　芳緑

榊

榊や垂も厚うも飾むらのすき　上毛　歴山
飾つまし き家の飾や新子等、　玉蕉
ゆすりとやかなる翁てるまく訓傳、　青雅
榊や神の灯うつる かきつ巣　巌琴
榊や松も知るとぬ海ともと　吉陵
ゆすりする無ふ上神の供うれ　清矣
榊や家奮ゆうつる地新　聽泉
榊や白鷺を捕てるもぬ地　東京　鈴波
ゆすり奮の松に攘らぬ きうれ　寸芳
榊や昔ゆうする山杉家　芳緑
榊や座るあれと まきの　文禮

大服

大服の白ひあつて産家の事　磐城　好雲
大うやまた新嫁は 家うしき　相模　青圃
大服ゆ産うく新の きこうれ　吉窓
大服や幸嬢にうす 花出婦　東京　尚毛
大うや人の多きそ 家の曙　芳緑

稲積

いねつむや人の心はゆるみすり　信濃　公雄
稲積や宮をするも 幸のゆるみ、　俳梅
稲はむやうこに つまし 墓を　上毛　洲巌
供物すうちを稲つむ下新うれ　巌琴
稲積や新の 雀を ゆうから　青雅

[illegible]

稲積や新に扇をあてもなら　上毛　一徹

稲つみ〻ゝに降るゆふ雨うれ　羽後　以考

いね積と手にのりあまるの山　、　真英

稲積や机に肱をはるうゝ　、　茲山

稲積や吹てそれ倒れ　、　青柳

稲積は種とすりたる心の事　聽魚

以杯ゝ色や夕鍋のあ[illegible]　椒北

稲摩て又酒を呑むあるうれ　相模　月待

いねゝ色や清き〻ゝるすま　、　鄙岳

稲積や物の沖柱　胡のあれ　雙松

稲積や常ゝすゝ[illegible]　伽柱　吳雪

いねゝ色やそそみ〻人まひと文　吉窓

稲積や琴のちらゝの中ゝゝ　周防　歌年

稲積や孔子伝は[illegible]　武蔵　可山

代継ゝの稲ゝ色ゝゝ　東京　蕎芽

稲積や沁る陽の音中ゝゝ　、　重峰

稲積や蔵の蔵ゝ[illegible]　鄙波

いねゝ色や年始状なゝ[illegible]　尚雲

稲積や着暦ゝ[illegible]　芳緑

初荷

不乃来る馬士ゝ足遠ゝ　相模　岡茶

柱屋の初荷　見事ゝ　椿椿

ゝ色や門ハ初荷の立ゝ　月待

盃を重ゝ[illegible]　立

[illegible]　鄙岳

浴して馬も機嫌の初荷うれ　青圃
ゆきもの成今年の初荷かな　上毛琴芳
筆ぢり書く年初荷状　望山
船うらも陸うらも来る荷哉　素白
第一作庵の初荷も義よかく　嶺琴
心這入に芋ゆき初荷うれ　湖巖
澤山に積荷舟なは荷哉　青我
又あとに来る初荷の車うな　一城
来し作る積荷かな初荷かな　歴山
声高にうたて初荷の車うな　羽後真人　為勉
来る品を差つ引く初荷かな　里山
鶏かうしてふ初荷かな　月郊

小野うらの初荷や　柳ゝ　嚴俊
積上る初荷や　冨士　東晩
車仕る馬仕る這入る初荷うな　武秀　拓華
初荷れしと提灯仕る初荷かな　紫山
入船ハ皆初荷うれ　大滝
吹つのる風も花もぬ初荷かな　琪園
雪空も晴るゝ初荷の往来うな　仝
初荷とて雪むら　馬も嘶きて　春窓
強荷も一さつ売る初荷うれ　東京　呉雪
日和も仕る花ゝ川ゆく初荷うな車　羽翁
数珠玉も花も初荷の　紫雲
尺ゝ年仕る初荷かな　文禮
強い初荷かな　芳緒

福引

福引や　墨すり　人の　羽後　淇山

福引の　数に　行脚　も　、　一多

ふくふくや　庭の　紙　ふる　品　飾　上毛　真跡

福引や　ふくふく　湯　の　沁る　音　素白

福引や　壺の　降　も　音の　つ　淇園

福引や　勝　ふ　る　子　も　多　い　新　丘

福引や　紅　毋　の　恨　か　豆　も　報　吳雪

ふくふくや　姉の　智　も　ま　か　れ　て　家平

福引の　笑ひ　聚　や　陸　陳　一如

福引に　引　ふ　く　日　脚　ふ　青園

福引や　言　ふ　ま　ま　ふ　ふ　ふ　て　東晓

福引や　勝　せ　て　戻　す　陳　の　子　雙松

福引に　引　ふ　や　ま　ま　ふ　ふ　ふ　青秋

福引や　子　供　の　邪　ふ　あ　ま　ま　す　芳

寒　に　ふ　い　ま　ふ　ま　ま　ま　て　葉屯

福引や　ま　ま　ま　き　子　に　勝　せ　た　き　芳絲

子日

松　亀　を　ま　ま　人　ま　ま　子　の　ま　ま　れ　喉風

ま　ま　ま　ま　ま　人　ま　る　子　ま　ま　ま　ま　羽後　素泉

ま　ま　ま　き　人　に　ま　ま　ま　子　の　日　蘭雨

久　し　ま　ま　風　晴　き　ま　ま　れ　日　発

ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　雙松

ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ　ふ

振袖の人を踏まるる子の日かな　也有
無住わく時も子の日の松ひとれ　柳絮
子の日する野やはうらの人を祭　吉窓
松なる餅なを門のほし　湛園
美しき野焼のたつ子の炭　玉蕉
さて掃す老の子の日や庭の松　李雅
昇る日小松の白や野の子の日　岡茶
頑伝ひ来る人もあり初子の日　一知
庵うつる松の眼ゆつく子の日の　仝
垣繕ひ野の竹まく子の日の　也峰
独歩を供はしてゆる子の日かな　鶯也
小夏衛　芳緒

難す小夏言葉もなくて　小夏衛
冷まじ密の蹴り小夏衛　義琴
花の春もあり小夏衛　柳也
いたづらに振倒す小夏衛　以春
ほ足もとの庭ちる小夏衛　蔵山
紅梅の雪とふるん小夏衛　一多
初雷　芳緒
初雷や梅ちる裾の初きくれ　朱京
ふ雷や足ちる日に吐ちる沖の也　梅年
多秋や初雷よ　弟うつ　寸芳
初雷や座敷を出て子の花　葉雲
ほつ雷に花の封ぬる時雨　泊翁
　　茅

初雷や木を裂く程の音もして　蕪柳
さつ雷や初ひうけなきこゑは　湛園
初雷や常にかはらぬ空の色　杏窓
はつ雷と鳴かわるとの聞きそれ　湘柳
初雷や雨うるおす空の色　士行
初雷や山の眠りもさめる程　相模　魯石
さつ雷や柳ちらす山の吉ひより　一和
初雷や降るみぞくとも知らぬ雨　月翁
はつ雷のあとや鶯なく松柏　貞哉
初雷や崔さわぐ藪の中　青柳
初雷や空さつと西の傳る　蘭雨
さつ雷や牛ハ踏まれて知らぬ顔　以孝

初雷とにぎ〳〵ぬ鯉てうら　喰風
さつ雷や戸を引くうちに時うる　芳樹

浮氷

巌とも見ずに浮ひ浮く氷うれ　喰風
潜子田の殿とと浮く氷う車　柳風
浮上る氷のうへ此ものうな　里山
浮て流れ源てもむ氷う鯉　蔵山
流りにハ舟も通ひ浮氷　一雪
枝垂木の新きす池中浮氷　月待
浮〳〵た氷に面の降りうれ　鼎亭
浮たねも池とさい此氷の車　松洲
実南る筏り高る中浮氷　時月

氷流れ上を走る和田の氷　一島
草の芽に初されて流るゝや田の氷　鞍琴
梅川を渡て流るゝ氷　唐窓
墓守り驚き問ふ氷　仝
流れて絶て流るゝ氷可奈　文禮
張る網の新しい解す流氷　芳緑

流氷

鯨吼て流るゝなり響の海　喰風
流るゝ音たゝうなりねるへ　湛山
梅雨きのふ六解　流るゝ氷　貞哉
月さゆ流るゝ歌の川や音　里山
流るゝ歌と川音　梅の声　寿川

はつきりと雲山うえて流るゝ　羽前　楊雄
船の出たあとの月歌や流るゝ氷　豊前　晩翠
川添や流るゝ歌を峰の雪　唐窓
流るゝ月のふるよ　梅の声　一如
戸の透や流るゝ歌の月さゆる　拙華
流るゝ水の流れ　雲の新　琴芳
浦風や吹きくすれば流るゝ　峨琴
流るゝ船やひと眼に岸房上総　廣京　芳樹
流るゝ用意をかし　老の園　寒齢
流るゝ氷にもねたり桶の篇　芳律
流るゝ氷れと舟をんるはなし　文禮

春の霜

夕なぎうら独る野をわ　春の霞　我琴
能石の帰さをうよ　春は霜　青園
春の霜　蝶の羽風よ　蝶うら　吳雪
旅人の　紅葉　庭うらもるの霞　琪園
門掃て　朝こしらわ　春の霜　羽後杉菅
旅をうら　春見よきりわ　春う霞　聽泉
庭掃て　さらつきうう　春は霜　孝川
春こそ　斗り　暮しう　はるの霞　唯風
春も又　霜ふり　定まる　日知うれ　才芳
笹を　遠く　朝月　春の霞　芳緒
春　霄
待つ人　もなけれとた　春の音　月待

春の音　一如　春の音
はるは霄　嶽琴　はるは霄
行灯の　明りに　夕て　一島
嫁の来さ　家を　知りん　春の霄
落ちらき　石蛙　鶯わ　春は音　晴月
眼鏡　深のき　裡ゆわ　春の音　吾岳
鶴もれて　市えてあたり　春は霄　一菓
うたて　春八　ひつうれわ　春の音　玉蕉
さらへ　きき　春の音　一識
戸明れ八月　出てあり　春の音　送水
春の戸　灯明る　春は霄　蓬殘
待つ人　春の音　岩代　明野
異見なし　八　昔　春は音　唯風

遠き人里に住しるや　春の雪　羽後　木風
ふるさとのなほ見ぬ花や　はるの雪　一雪
歩行ハ歩て都なり　春の雪　清美
町筋の花なり　春の雪　松雪
春ふきて歩るく　毎日雪灯　月翁
聖なる人又ゆかしく風意　春の雪　長雪
裏町の戸の明てあり　春の雪　湛園
雪毎に繕ふや　春の傾窓　春窓
近くてある庶に人ゆ　春の雪　仝
ねるしろき時ゆ　春の雪　文禮
庵ならん庵も窓あり　春の雪　芳緯

春　日

春の日や寄佛　行寺　閑葉
庵ゆるきき多屋の門や　春日和　魯石
春のりや鼻をなるる池の魚　上毛　雪春
春ふるの巡てゆるや　富士の裾　巌琴
はるの日や紙うら揃ふ囲碁の客　晴月
春の日や豆弱連の　神　清　青我
春のりや水を投げ迎む畑の石　歴山
春ふ日も又暮安　山松ひ　羽後　松翠
ちるのねに出てゆ　ふる扇うれ　青柳
面白き旅ふ　なるぬ　聴泉
綿の母が繰る糸長き　春ふれ　歌年
人波を多数によ　ふるる　晩翠

春の夕や煙管咬えて座せり　唐窓
春の夕や海そて眺る人ある　雙松
南なる山に出て面白き春の月　ゆ
野の道や春の夕しき人通り　可芳
春の夕や座せりして星流る　芳樹
春の夕や黄なる菊の苗　芳緒

春の鐘

春の鐘鳴るまて光る雲くもん　弄山
住僧姫の脈を細し春の鐘　以孝
面白く鳴て春の夕しはる鐘　為勤
鳴るやうちにやうちる春の鐘　公雄
鐘撞やまもり春の鐘　岡美

撞るの眠りも春の鐘　春の鐘　望山
春の鐘常より高く鳴ける　鶴洲
うかとして鳴きこなるひぬ　春の鐘　吉窓
撞くうちとまるものあるや春の鐘　芳律
近もとて鳴やそこねる春乃鐘

西行忌

墨ぬまに伊勢の山の春や西行忌　相模　月洲
鳴りやる門田掛たし　西行忌　岡美
いつまでく寄せる時ちり西行忌　岩代　青山
憂き旅のうしのうしの西行忌　梅鶴
言の葉は花の春も開ける　西行忌
春然と鳴て立　澤也　仝

阿波の海解そうなる頃や西行忌　乗山
旅人を葉のなりして西行忌　淇園
とすれてもすられぬるも西行忌　仝
能き人のまこと哉や西行忌　杏窓
冨士をうる心の腐や西行忌　酉水
旅舟の心合やや西行忌　芳緒

鷺

鷺一羽来るや呂の紅心　喰仙
うそ鳴や墨のやうなる峰の松　蘭雨
鷺ひるやもちなれて五種抓　淇山
八重咲うらふきうやうそのゆ　玉蕉
鷺帰る彩墨のして繰く照　近山

うそ鳴やおーの雨より虹の吹く　青圃
鷺鳴や日のさして雨降る　雙松
鷺帰や戸張の絡ゆ乾き　晩翠
ゑ上れば　杖の雫やうその声　淇園
鷺姫の機嫌　席や琴の曲　杏窓
ゆううそ鳴く戸伝ひ鷺の声　雲峰
うそ帰や杖を分の雨上り　尚雲
照鷺や心やうすれば庫の雫　芳緒

野老掘

笹の海ちらして下掘る野老哉　蘭雨
掘て来る野老するもあり　玉楼
主貴ぶるゑふ上るく野老掘　幾年

足元の野花は人を誘られけり　素白
海老腰は年を自慢や　野老掘　杏葉
貴人の都をしらぬ野老哉　紫雲
掘ふと自分も初め　野老哉　芳緑

種蒔

種蒔や　柵の繋ぎ　苑いぬ　宣
たゞまきや　今年うら皆　賀まうも　青川
種蒔や　人に知られぬ　ところ　素魚
蒔官も　人を　一種　蒔て　呉竹
家ひとり　年毎　種を　蒔　紡ず　紡翁
種蒔て　ゝや　蒔ひ　ひとり　芳緑

菜の花

稔又根をゼて菜の花の白和ぶ　巌琴
菜の花や長ん盛る　西もなし　歴山
なの花や　町と年　わうれ道　一巌
菜の花は香に倦く　旅の夕へぶ　月待
菜は花や　ゝ年　眼の眠くる　鼇亀
なの花の　景色　ぶる　船上　鼇亀
菜の花や　きの　の雨に　香のほこる　亀鼇
菜は花や　湖を　紐の　岨畠　苺芽
菜の花や　旅　の　眺　永哺
なの花や　ゝ　日和ぶ　法美
花ゝ　菜の香に　ゝ　日和ぶ　月翁
油菜も　咲て　同　花の色　芳緑
文禮

蕨

宮たれよぬれて花房蕨哉　喰風
花房や蕨も人の眼はとまる　月翁
町へ出る山裾道や花あさみ　松雪
活て見る心やさしき蕨うれ　芳緑

春野

春さしを歳とりもとる春野哉　喰風
春の野や寄りなのらの物少年　淇山
春の野やさと毎毎よりくさ立　松翠
春よ野やりたい方へ芝のある　青柵
春の野や何やよへ歳つく人通り　閑貞
　　美

春の野やきのふもとたる人の通り　美圃
春よ野や人のまゝの雨雲　公雄
春なれや日ふくまさる野の景色　逸水
毎毎に見る春の野面うな　蓬矢
旅なるらいなるうな春の野道哉　松洲
春の野や幟立たる流行神　義琴
春の野や鶯連ゝて苦くせあ　告窓
野ゆかハ春の混れ老てさへ　文禮
春よ野ゆ来て皆下りる車哉　芳緑

山焼

焼て来し山や夕鍋の膳の光　喰風
山焼たあゝ水こえた夢緑　淇山

山焼や言顔こゝハ雲なから　素泉

山焼の時り涵くや　庵の窓　仝

山焼こゆて高ゝく旅舞うれ　柳馬

多方〳〵て焼や西山空の山　為勅

山焼の煙りかゝるや富士の嶺　一多

山焼る樵夫のさはく柳うれ　青葉

山ゆきの新も屋ゝし早鶏うな　麥川

るやゝる屋ゝ山焼の煙う軍　送れ

山焼や嶮やゝ作る屋根うつり　浦柳

ゆゝ焼や蕎て入江よりゝ白ひうな　琴芳

山焼の煙り地を這ひ白ひうな　一鳥

山焼てひゝ中言る峯の松　近山

山焼や煙りの中ゝ峯ゝ瓶　仝

山焼やゝ夕横きゝ夕鶴　玉蕉

山焼の煙りゝ中〳〵うれ　長華

山焼ゝ時りすゝ鳥の竜　一和

ゆゝ焼や言鶏ゝ鶏文ゝ窓　蕉柳

山焼やゝゝれぬ言の庵ゝ来る　蕉鶏

山焼の煙りゝゝゝ中繋り船　杏窓

湖ゝ引ゝ中山焼ゝ　長雪

山焼や言のいゝうれ新の室　寸芳

山焼や言ゝ八宝ゝ昇る祝　芳絃

山焼や夕暮ゝ新のゝ　文禮

暮雲

年を経てはるかに蓬の面
うつろひて動くは蓬のひきうゑる
のそりくと蓬の中に青き草の面
其中に年に寄れる蓬
物もいまさらに見やひきうゑる
本末は未だ長やはしたる蓬
仮住の家もりに古くひきうゑる
月新に罷たる新やはー蓬
花ゆゑに心眼にそそり蓬
蓬屋やあらくかゝる蓬月新
まゝゆけば蓬迎の月や蓬

雑合

峰風　為勝　湛園　杏窓　仁　青園　栽琴　玉桂　一菓　青山　芳緒

勝雑の拍子うれてうらもの訓ひろ
雑ものの刈れる立ち悔り沈
汗まする冠の紐やくり合
勝雑は声に失せるの雑の雑ひ
意地やうしや貧たる雑　吾怨　雑浦　芳緒
引き歩にしてる長よ

曲　水　雑合

曲水や常まさしくよき風れ　蘭雨
曲水や鳥帽子うつ四つ手の上　永晴
曲水やられて源氏筆の鞘　青園
曲水や今時ハ雑の新　蘭雨
曲水や鳥帽子鎧たる松は桜　一色
青柳

曲水に魚浮く淀をあり仕り　者窓
曲水や常の姿ひも物もはるる　望山
曲水や心は通ふ水の上　一巣
曲水や吉年に賢うぬ美ひ仕　時月
曲水や流れ色なる小盃　士行
曲水や流石姿の庭もやう　芳緒

鞦韆

ふらさがりやあるるのもとに　呉羊
鞦韆ゆられ居る家の武家育ち　嶺琴
鞦韆や花もるる下の面白き　き山
鞦韆や世れ物まりて寄る松　ち城
鞦韆　素白

ふらこやを賀の古の軒ふる　連
鞦韆や幼年も寄る家の者　象年
鞦韆や はるれ初の侍　吉窓
ふらさがりやなれしまの減　仝
鞦韆や浮もしうする家上を　す芳
鞦韆の あるや 法まる松の声　芳緒

梅若忌

能いひ寄もさそて梅若忌　嶺琴
初月もるし淵田の昔や梅若忌　上毛　花月
浮る寄ぬるくん地や梅若忌　羽後　露月
柵るも かく 墨田や梅若忌　以孝
京食に 紀日もるるる梅若忌　聽糸

あなかちに降るとも梅若忌　本圓
降らずとも ぬるゝは袖よ梅若忌　湛園
時雨降る 霜の毎也 梅若忌　仝
ちる花の下に座佛也 梅若忌　清泉
花ちるは是恨とはいへど 梅若忌　閑茶
泥の音も花の曇りも梅若忌　一和
心なる 神ぬらしなり梅若忌　仝
俳ゆうな 堤 續き梅若忌　葉屯
梅若忌 ゝ 柳も忌 伸ゆ 梅若忌　尚雲
祭るは ぬるゝ是恨 梅若忌　鈴波
三粒位も降らぬは 是 梅若忌　寸芳
道連の 泪もつきぬ 梅若忌　芳樟

寄花恋

おもひ〳〵の相性もの 自ら 花
逢たらぬ恋 ゝ 似たり 花七日
初も一恋 花 ゝ に 婚り
紅つき 盃 うけて 是 花
花 恋 咲 廊の 初 恋
是 ひ ゝ 後 花 恋
時 ゆ ぬ 思ひ や 寄 恋 曇
花 自 恋 に 作 ゝ 歌 ゝ
心 逢 作 人 廊 一 花 の 後
姫 ゝ 花 ゝ 恋 ゝ 知らず 日暮 恋
結 人 の ゝ や 花 ゝ 久 仙 鶴

肥後

唫風
以孝
聽泉
芝蘭
吳吉
仝
杏窓
仝
晩翠
吳華
仝

ものいふも言はぬも並や仲の町　嶽琴
我おもひ屋いそ蝶　花見連　望山
思ひ遣りて見かとすす新や花の月　西蕉
なんうーと見るや花見の残ひ哉　士行
さーめ言いの新照るや花明り　吾岳
英實や見返る　並のまきまきり　月待
花見種別れもなき夕へうな　仝
思ひ子に灯火つら　新の花　陶茶
きぬぬくの神につ花見　素柳
拵花る多り　祝井り　亀の山　亀齡
咲花や人も盛りい　花きーう　蕎柳
見ね為や花の咲を　吟てうり　新波

結ばれる等の多や花見　尚雲
ひーと遣ものいふ　並も　文禮
花の嘉見惚ー新にかーう　芳律

遅櫻

人ーと世花見ーきな　嶽琴
京のつーね山の深ーや遅櫻　琴芳
開帳の れーきひ　ぬ遅きーら　晴月
遅いのも　又ほーらーぎ　梅ーな　近山
大寺の花ーき　うーや遅梅　紫弘
名を書ぬ　舞舞ゆーー　き梅　一多
鶴遅ー道面ー　遅きーら　青柳
新きる　深山ーう　遅梅　梅風

子年の三葉の中や遠き
空海を望む寄あり初春
対す事はちらぬ眺や遠橋
発る念入て咲ぬ歴櫻　武秀まなし
春の二葉遠くたん地を遠孫　清泉　一和
山陰や初ひすりけぬ遠ちら　吳雪　可山
然るの暮りもうえん歴をくら　亀鶴
心初れ心をうなす遠橋　雪丈
濤る木を葉る近初春　芳緑
連翹　文禮
連翹や極かる人の絶ぬ象　喰風
遠翹や彩色ある山うり　琪園

連翹や初ところなき花部うり　吳雪
遠翹や晴は淡紅の雨　晩翠
連翹の雨冠うり水世界　嶽琴
連翹は咲時より木もちれ色　歴山
遠翹や春の初の色　一鼎
遠翹や枯と初る人　粉波
連翹の寄部ぬ桔梗　芳緑

蕎麦

蕎麦や蕎の人ぬり　喰風
水平て寄行う家や　吉窓
川風や蕎を蕎は弼をう　鶴亀
春の音の軟うう事蕎　吳雪

滝壺の修繕する世話て百傳
門より人畜傳る歌と成るべく　恵鶴
紅庭や百を傳の心　丈芳
苅ぬとるる庭や畜傳　芳緑

綿抜

綿を抜くうちを旅鶴の借着哉　閑葉
綿抜や鶴く吹る松の風　一和
わく抜や吹れ出るの袖う浦　連
綿抜や今然底ふ子も立初る　琴芳
多郷金や七綿抜る子供うら　巌琴
綿抜や札所参りのはかはゆく　雪屯
綿抜に成てもとるや温泉の智　歌年

綿抜や茶の銭も出て地蔵記　里山
綿抜て来しう年輝き人参り　木鳳
綿抜信もうふいとまや船かり　月翁
言ふん綿抜よして都名　芳緑

若楓

吹て初く陰子になるぬ若楓　喰風
眼元に幕元りう若楓　清真
念入さ庭の掃除や若楓　逸水
頃日ハ庵も紅葉や若楓　塊仏
寂して歌のはもれる若楓　閑美
香る為立ちさうな色ふう若楓　拾華
和信ゆく池の小亀や若楓　春窓

吹荒の外に蕎麦の一芳柳　芳律

茂

酒つけた牛よりあとの蔭もなく　喰風
名残うら浪やりとすれば蔭哉　湛山
水音の後うつゆる蔭りかな　一多
美しくこゆる蔭りや宮ばら　聽泉
風の洩る透間も見ゆる蔭哉　雪石　信濃
時雨する身も洩さぬ蔭哉　蓬残
瀧壺の切れ切れ蔭哉　幾琴
歌の面を一日覗す蔭哉　望山
立枯はすくすくゆる蔭哉　玉蕉
不潔歌の汗ひく蔭の事　一巣

蔭ひとすじ幕のまよひ　花月
火を打て蔭枯はかなる蔭哉　吳雪
月の新月見えぬ蔭哉　東京　鶴石
神垣や軒の冷ある蔭哉　茂芽
夏人さす日脚のかたぶく蔭哉　鶴波
馬下りて端踞牽ゆく蔭哉　芳律
月の洩る袖を透ぬる蔭哉　文禮

芍藥

芍藥の重みに折れし花瓶哉　幾琴
芍藥や葉の花こぼれ水哉　松洲
芍藥の刈と株神に奉る　羽後　嘉月
芍藥は咲て定まる日和哉　清美

苟篁や下枯ハはうもぬ　造り庵　素白
苟篁や一株はした　作信隈　芳緒

蜘の子

蜘の子や産毛をせゝれ人の肩　桜弘
蜘の子や行方や知る後も　長俄
蜘の子やのみて見てゐる樹木迄　清泉
蜘の子と共に　搖籠の笹　伊勢　花鶏
子蜘の子のちらや　種蒔く箒きる者　雙松
蜘の子や小舟のるるの新作　青柳
蜘の子紙吹ちらし〻〻仲の秋　蘭雨
蜘の子や華信ちらし机先　為勤
子蜘子に旭のさしてちる光り　青山

蜘の子や　茶色ちらし　種俊　芳緒

行々子

葉蔭に人なき舟や　行〻子　呉春
一羽来て　藪一ぱいや　行〻子　杏窓
皆うみな鳴の信濃　行〻子　琪園
樗とれ蛙逃さる川や　行〻子　空
蔭切やとつうな舟逃せぬ川　布線
釣舟や　行〻子　倒柳
只さへも　行〻子　逸水
小流を　上毛　雪美
蔦小鮒ハ　行〻子　緑園
眠くなる舟の留守や　行〻子　吾無

夕ぐれの田ふなる池やけりゝ子　士行
やうまゝと斗り切るこゑ行ゝ子　一臧
人なら笛悟まれや　せんけりゝ子　蕉琴
よゝ切や道ともいくぬ　まなこ
明る新を行くす　明くけりゝ子　可山
船ちゝい触ゝ春ゝ　春ゝ行ゝ子　英仙
馬引て興せぬ　橋あゝ　けりゝ子　上巳　雙松
近道を来れ笛　橋なゝ　行ゝ子　連
新小水の上なら　明るす　けりゝ子　貞哉
押水の引て　明る　行ゝ子　素泉
舟の新を明るる早し　けりゝ子　松雪
屋舟明ゝ夜に出ゝ　春ゝ　けりゝ

泳いるゝ　帰僑るせん　行ゝ子　翁
落芦の株ゝ　川やけりゝ子　可芳
よゝ切や船に灯を　ゝゝ　芳緑

夏書

夕月や蛍書方れゝ　春ゝ　喰風
彩まれし　佛の像も　蛍書ゝ　月翁
蟬忍ぶの彩ゝ　ゝゝ　蘭雨
日射すも面すも　僑ぬ　蛍書ゝ　清矣
四五年の仏を相手の　蛍書ゝ　柳
灯ゝ逢ふ手をなすけて　ゝゝ　聽泉
早起をする蛍書の　動可奈　倶園
蟬明ゝ　ひゝや　蛍書ゝ　机先　義琴

眼安をそへ　協の業をなる百也
月光の鏡をまとれて墓書うな　一葉
我とわか名をもめうる百歳　芳緋
敬をうる祝の減りよ　百日　文禮

掛香

掛香や庶桁を上る着うへ　嶽琴
掛香やゆうき新を笑に　玉蕉
掛香を戴をうり　法服つき　素白
掛香や通りを過たるなつうみ　士行
掛香や近き中の禮儀さて　松洲
掛香やわるもの人はり遠ひ　吾岳
掛香や嘲をかをる　人の中　遠殘

掛香や奥奉公のそたしなし　稚風
掛香や年をやうるる業の給仕　為勤
掛香や　我なりなるたかくるる　雲峰
掛香や其報ひを　花をみち　芳緋

菓　日

今日なら開佛を死なし　嶽琴
本書を白ゆうう菓の日　花月
紅葉や菓をるかの迎ひ　緑園
野分や用をなれと菓の日　一島
蕩後る空や眼をつる中を　玉蕉
疾を起て　極めりしく菓の日　松洲
杖頭ひと野遊てもそすの日　木風

用なき紅葉かな　葉の日　素泉
赤く咲ぬ野に　人を戸や葉ぶき　柳風
降るを皆々の蓋の雨　為勒
殊更に酒も味なし　葉の日　貞載
紅葉よ弁の毛もうなすの日　玄弗
淋しい人の深切なれ　葉の日　歳年
心地なし　葉ものの庭ぶり　武秀　業房
空てるうしろ葉ぶき降るを　拈華
吹るも紅葉ん　葉の日　可芳
降続く中に葉のふるうれ　仝
ふ家ゆるるのすわれ　芳緑

懺

まんかいなる懺を膳かい
言の端を足して　立て懺かな　喰風
多伽ゆ角力を手ぶるぶ　清美
世盛りの高る滝の懺の角　一魯
魚屋のあてにしてゆく懺かな　為勒
本なるき風の音る懺かな　義琴
裏町へ迎れ筆るきの　玉桂
時雨る空や懺の遠ぶき　晴月
心地なく吹紅風や　初懺　一徹
降きりなもの時ゆく懺する　一和
行ぬ者なき門のぶ　浦梅
苦のの家の暮れの懺なる　公雄

立初る日の風もうるき幟かな　祇園
新しうの傳へ出る幟可南　呉雪
出る時紅無き出る幟こうの　仝
主町の世盛へ人の乱幟かな　武秀
清義の多柄新しうとう幟　鶴秀
白帳をも見張る高のやうに　仝
拵まりて立つ子出る初幟　茅舎
孫の為も初とゆるる幟うれ　業秀
初幟らしや奉行立ぬうち　可山
開き他も家数の強し幟うな　拓夢
奉行に景色悪うう外幟　仝
鯉こをもたしかよとうを幟　茅舟
　　文禮

ひと村や初たし幟の紋所　芳緯

競馬

勝たれ駿馬も嘶く競るや　青山
特有の風の音ある競馬かな　告窓
主捜してあと見渡るたうくる　俱山
人も少し競馬　芳我
勝つたその真ん中人も競る　麻鈴
知る人も皆勝せたうくる馬　東京　鄙岩
競馬柳の長垂もしうる　仝
ひと競る風迅しうう競馬　芳緯

暮夜

七夕新暮の新あ人ぬ旅つれ　峰風

碁の新しき灯もえ出るかな　鴨川京　以春
碁に夜や長くなりまさる　人通り　奥哉
夏の新しき家を美しや　水の音　清美
森遠れ深けはや碁の新しき明るく　供山
碁の新しき景色　深くなり　灯　青山
碁に新の音絶えれば　忘れなり　上毛　梅白
碁の夜や立流れ　清島の町　歴山
夏に新や　海も色　清明るき　琴芳
碁の夜を　二に　行の　格の人　遥水
碁に新や　深まる　て　神なる　清糸
碁の夜や　灯の　弱る　向河岸　英仙
碁に新や　美河に　身の明弱る　素雪

碁の新しき　聞くなり　鶴亀
碁に夜や　来た鶴の　鶴波
碁乃夜に　明強き　行燈の　寸芳
夏の新や　森元　席　き窓の　泊翁
碁に夜や　相碁と　れ　鶴の　芳緑
碁の新を　心に　暮る　嵐山　文禮

火串

旅ハ　火串　知らぬ　哈風
火串さす　山元　下る　新　柳風
焚火　る　新　里山
河　新　き　火串　蓬残
明星　消　吾笛

雨もよひ行や火串の煙り
柳の灯を見捨て去る小舟哉　花月
寺のある山もやうしに火串哉　玉蕉
本堂のちらつく灯かる火串かな　幾琴
消さうに見えて根づよきかな　倩園
燃ゆる火串に曇る端山かな　関美
山深うなりし新毎の火串哉　一和
翌を忘れ別けきぬ火串かな　素雪
火串よりて無に成にけり　芳緒

東京　真風

小鰺

はねをかたうちに重なる小鰺哉　一和
湯ゆへや小あぢの料理をひかれて　麁艶

流れ川岸を小鰺の荷揚ひ　永嘯
黄昏や足を寂寞る小鰺哉　文禮
掃拭をすくしみよ小鰺うを　芳緒

胡瓜

百姓うて嬉ひをかれ胡瓜哉　梅白
砂糖かけてあるきくかな　嶺琴
花のあるうつくしに胡瓜かな　吳羊
鯉料るりふ元神しきまく　逸仙
苞無ゆ新川岸に美く胡瓜　月待
幸のつゆぬ世ひものく初胡瓜　素泉
新みるとなるうつ朔瓜かな　吉窓
吳うるる国う移せる胡瓜哉　松雪

柱ゝ　行ゝ　胡飢の実ゝ　盤ゝ

蘆の花　芳律

蘆の穂や沼の濁りを咲浣し　梅白

水の花や弁天島の名々しき　清泉

蘆の穂や漕ぎ寄す舟のあとを咲　寸舟

蘆の花や　早にくるぬ池の水　素白

ものけなる蘆ゝ　ゆゝしく蘆ゝ　聽泉

灘乗空や　苅ゝ蘆ゝ　苅ゝ蘆ゝ　吳雪

蘆の穂ゝ　ゆゝ書ゝ　子等の盥舟　杏窓

ものの如や　吹ゝ蘆ゝ　にゆれゝ　咲ゝ　永哺

蘆ゝ　穂ゝ　月に沸ゝ　水の白ゝ　池　連

蘆ゝ　花ゝ　掉ぬゝ　舟のあと　蘆ゝ　可山

投網ゝ　ゆれて　香ゝ　ゝ　蘆ゝ　花蘆ゝ　素歩

蘆の穂ゝ　冠ゝ　蘆ゝ　ぬ池の亀　寸芳

水の花や　連ゝ　ゝ　ゝ　芳哉

藻の花や　半田ゝ　ゝ　ゝ　芳律

紅の花

ちゝ　藻ゝ　ゝ　ゝ　紅の蛇　唯風

咲ゝ　れ　ゝ　ゝ　月静

掛ゝ　日和　ゝ　ゝ　清美

紅掛や　男女ゝ　ゝ　ゝ　青弟

橋ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　琪園

紅掛や　咲ゝ　ゝ　ゝ　杏窓

人ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　梅白

揺む人の袖より照日やれの花　士行
摘ばゆく末も盛りや紅の花　兎月
紅摘や翌日も晴れの苗宜　近山
お揺むの瓶ひもすがら寂しう事　寸芳
揺む指も深くまろう紅の花　尚雲
洗まる袖に逆さまれて寄う紅花　芳律

青鬼灯

鬼灯や青いうちから虫つかん　玉桂
鬼灯や青きうちより眼はまる　等我
鬼灯や赤くまいのに寂まるて　一菓
鬼灯や青さも乳母の出産ば　蓬残
子んや　まるうつくしきもきのふる　淇山

眠るうや　まる鬼灯も　枕元　真哉
鬼灯の青きも寂れる市日哉　芳律

紫蘇

開けんり業蘇まるて寂る田舎町　逸水
紫蘇斗り香にくつる面の畠哉　聽泉
條の葉に紛れぬ紫蘇は白いば　里山
畠の葉蘇の独りり庵の庵　以孝
蔭も種こしらへて業蘇畠　栽琴
紫蘇畑や　心星くまきまる　寺男　義月
ちみくと日の照ゆ　業蘇畠　玉蕉
箱庭に眼にくつ業蘇の二葉哉　春雄
まる業蘇の白ひり　箸のすみ色　尚雲

青葉や鰹や背戸の[illegible]人指減らす　文禮
紫蘇まぶる丞ねてまくり屋浦寺　芳緑

清霄

清霄や裏畑道の[illegible]　唯風
清霄や日和勝なる花の色　聽泉
清霄や[illegible]寺の松　俱園
清霄や照りつけらるる日の白し　一和
梢まで咲ひきり渡霄花　鶴石
清霄や咲上りたる咲下れ　汐翁
清霄や留寺に成たる萩堂　芳緑

葛の花

花ちてうつむき伸るや葛の蔓　唯風

倒れ本の杉ヶ咲ひきり葛の花　一角
新屋るる利ねる本曽路や葛の花　芳泰
活られ渡逢た咲ひきり葛の花　緑園
[illegible]ハ[illegible]葛の花　杏窓
雲端待登る小道や葛の花　泰緑
山の端や初ひきり葛の花　芳緑

風蘭

風蘭の香や渡る[illegible]窓　月鶴
風蘭や杉ヶ近き[illegible]　俱山
吹通す風蘭の香や別座敷　梅鶴
風蘭や風の[illegible]る　吳童
風蘭を提通り旅[illegible]　芳緑

澤潟

澤潟や風泥をまき出れあし　吟風
物もたうや田へ巻る水の流れ　梅白
澤潟やたゝ一水の一枚田　玉蕉
澤潟やあの不見なき年月　一和
物もたうや保ちうねたる鶴の蔭　杏窓
澤潟や出水の跡は葉よりはまる　春絲
澤潟や面も彩まぬ芦蹴り　蔦芽
物もうや此佛なうもよき年所　芳絲

暮草

暮草や猪うもならぬ市幡沼　幾琴
暮草や行程よ物の影　我

夏草の生ひ立ちうぬ多我窓
夏草や元ハ雁水の関ハ道　近山
夏草やたゝきもれぬ廣野　月彩
暮草に雨のたゝ迎む白ひうれ　蘭雨
暮草は景色なる西なる日ハ　聽泉
夏草の埃ゝ洗ひ一通り雨　吳竹
暮草や小さゝ多刈残根の強き　拍華
たゝ草や古井に標建てあれ　彩波
夏草や此海道なきまに　芳絲
夏草や小ゝ有馬の山つゝ　文禮
加茂川や吹さへすれ涼き風　吟風

眼の届くまで田の面や青嵐　青帝
杉戸声杉の程佇居まで嵐　湛園
海苔干すまつる多や青嵐　吳竹
柵すゝぐる泡や青嵐　一和
杉風の杉をはなれて青嵐　閑美
那智山や瀧うつる青嵐　巌琴
酒の臭ひ　碑うつる青嵐　近山
山陰すゝぐ月や青嵐　一島
青嵐面杉の空の晴ゆく　花月
水あるを出て吹うれる亀青嵐　綠園
鮎い宮ゆしてゆかさまるあ嵐　松洲
青嵐風の吹て去らぬ赤城山　琴芳

桟木を掛ける中や青嵐　歷山
さゝ艘の糸みくしの青嵐　寸芳
青嵐吹や　漂ふ捨小舟　仝
網に入る魚を繕ふ青嵐　文禮
必警の立すゝみの青嵐　芳律

水青

殘る歯すゝぐ叶ふて水青　吟風
船待や腰を伸ばして水青　爲勧
ものはやすまぬ水青　吳竹
泥の多　一番や水の多　巌琴
ぬれさぶの佇居ぬや多青　杏窓
舟宿の料理多早し水青　湛園

汐まち新もち〻り水青　歳年
茶の安き世界〻〻〻〻青　紫恵
下戸に似ぬ酒すの〻水青　英仙
年ぬかりこと之ぬ〻清中水者　翁岩
ちつ〻の博〻〻〻〻〻〻〻　晴月
〻り〻に湯澄も清て水青　芳緑

新麦

新麦中苅らぬ畠も有刈
積上る俵〻〻〻〻年麦　芝蘭
新麦の味を蓋今日待ぬ　一多
新麦の味ゆめ今〻坊の客　浦柳
湯にしても別を香辛ふて麦　逸水
恵齡

新麦中稲の手漬も蓋〻〻
新麦中まち〻萬〻の好〻き　茂芽
新麦中安き好〻〻〻汁　芳緑

茶漬製

瓜の四朱擇る中茶漬つけて　唐窓
茶漬をつ〻る中茶〻も知らぬ人　幾琴
なら漬に丹精こ瓜目張る〻な　松柳
能き漬中茶漬製中瓜の色　茶麦
茶漬に瓜も漬人も擇みり　芳緑

蠟

燭の横発すら中雨上り　呉羊
ま〻ひ〻も中茶よ〻〻時も五　蓬殘

螢や仏を通すぬ堀の内　一和
まこもの花や扉をくぐる家　格風
堀やもろかとぬれ文集の　雪峰
法ゝるまや乾く清水の枡　寸芳
螢や出そうとすぬ墓ぐまで　芳緑

箪笥

月のものいうてひとりや箪　吟風
四方山の噂や樹一箪　多弗
旅宿して先ぶらりたのもう　一多
来ゝ客よ胡座掌ゝ箪　緑園
伸縮る田面眺めて深山路　義琴
旅寝の客もてなすや箪　仙樹

敷うくてる月を待ゝ箪　月洲
塗盆の上ゝきゝなるたうもう　義貴
湯上りの先寒きや箪　東京　吉怒
花ゝて嘶嘶けゝ箪　貞松
燈籠よ灯を花ゝせたるもう　寸芳
松の新膳ゝ箪　尚雲
手枕の眠ゝこゝろや箪　都不
鼠駆ゝ扉ゝ動かせて箪　芳緑
紙の月ゝ寄る寄ゝ箪　文禮

祇園會

祇園會や樹ゝ町の中　吟風
軒の名をなのゝせて見る浮の兒　芳代　有儀

祇園會や翌日を浪人の橋普信　晴月
祇園會や一ふくひろまる遊武者　吳雪
祇園會云の曠や貧しきうらもん　湖園
とれたてる可笑齊や洋の兒　古意
船祥や一都の町よ人の波　仝
祇園會の暑さふくるる紙亀　喜哉
祇園會や紺屋豆腐加茂の水　東京　菊支
きくとんるやふくの袖くよ行の音　白人
祇園會にうなり亀男の子　夠波
祇園會や京に貧しき町きた　芳緒
鞍馬の竹切
仏切や鶏のそれたる鞍馬山　喰風

竹切や膝くり芝人の山法師　月夠
仏切のあくる都うり　廿日月　聽泉
仏のまゝみ切ら牡蠣の蛇くまる　義琴
竹切や昔わすれぬ鞍馬寺　玉蕉
仏切やをかしき僧の才拾へ　士行
竹切やそかゆにならぬ膝のまくら　吳雪
門法師や一仏切るまくの逢屋　菊支
仏切を笑ひて拾ひ里童　毒鄙
竹切や法の力を深ふくき　芳緒

施米

禮いくて袈裟ゆり歩す施米か　喰風
旅人ものくてる蝶うる施米か　月夠

開き田のもゝ草繁るまで　旅乗哉　梧桐
やてもさん實るまりかさ泥旅乗ハ　拈華
ひと粒もおろそかならぬ旅乗哉　寸芳
山里の秋いひもはけ旅乗うなる　洵翁
有かゝや旅乗ならひし　田の声　素雀
仇呂なに情もあるる旅乗哉　芳祥

雨乞

雨乞や徒呂ぬれ　仏男
乞ゝ雨焦ゝ田畑も餓る　拙白
雨乞や雲の言葉よ人の声　岩琴
雨乞や衛經ひゝく酒を被　歴山
雨乞やはや雲ちゝ神の歌　一島
琴芳

雨乞や誰ゝ雲ゝ雨ぬるまなき哀ひ　我連
乞遠ゝ雨乞　休みを觸れる村　雙松
雨乞や田の中からも立つ陽ゝ　春編
雨乞や月新を海ゝ雨から　琪園
乞遠て焦ゝ　雨の乞ゝ　空
祈ゝ乞ゝ雨が降らぬ海ゝ　月静
あれも雨乞ゝ　帯ら　泥の人ゝ
雨乞や雲の遠ひも新もき　真哉
雨乞や祈ら雷も乞ぬ　以孝
雨乞や村の月新を　産ゝ　英仙
雨乞や野ゝ山ゝ　義鯨浪の声　義雪
雨乞や根のなまき　雲も心ゝ　横濱　薫甫

雨ふる夏くさかしき出立なる　鄭岌
五月雨をあつめて早し最上川　借羽織　尚雲
雨ふり正直男　揺ひかり　芳律

露涼

露涼　花ちるあとの草ばかり　蘇芒
露すゝ洗ふやうに白き雪の色　巌琴
露涼　紅の赤覆ひ　吾岳
寄すゝ月ある松の下かげ　近山
露すゝ　暁起の　庭掃除　花月
笹舟の灯　影ちらみて　月洲
露涼　松見上れば　影ちらる　桃瓶
起されて上る　笹舟や　露涼し　淇山
風ふり雨ふる露涼　井の奥　古窓
露涼　ふかふかと　山音　象峯
露すゝ　葉舟ゝゝ　月の照　淇園
寄涼　息かけ野路の　蟬心　仝
露すゝ　鳴ゝ斗りの野の景色　貞松
露涼　蛙の宿　紅灯　寸芳
露すゝ　甚ちら露の　消ぬうち　文禮
露涼　太蘭を　月の照　芳律

秋近

秋近き　鍋や　影の　拙笠　吳雪
悔ちらし　障子つ洗ふ　松風　古窓
秋近くちらぬ　屋根の　足ぬ　仝

秋近し　雨こそ降れ　山の根の雲　芳柿
揉歩きハ秋も近くなるはめば　梧風
秋ちの　日黒み紙の編こ賣　芳緒

雑

形も無き　種たきこ鶏の姿かな　尋香
うこかぬ岩こ　寸上る浪　常陸　樵翁
蛇捲く　潛の　巻ハ　甚めきて　香
巻ハ　巻を　巻ハ　休る　翁
秋も暮　月のかゝやき　淡こし　香

ウ

是こそ　蜜柑　金柑　翁
ひこうなく　てもなるなる　老樂　香
洗濯の　懸ハ　袱　翁
洗らせる　湯も　加茂川を　流るやう　香
鞭　ゆく　駒の　前　掻をする　翁
糸筋の　あかうさ　まなる　桔梗　香
月　新　るまい　ゑ　ハ　歌の　空　翁
はちく　こと　扇子　拍子の　こゝ　搗　香
いやしみ　なく　善　ゑ　清　貴　翁
まなまれぬ　三度の　腊　ハ　庵かし　香
ないく　いく　ても　人の　七　翁
花の　盛　なる　か　中　ゑ　る　樗　好　香

声も機嫌よつれる 鶴
二オ 義引野中の家ひとくき 仝
釜揚温飩也朱合てある 香
まちまちに咲咲の中かちり 菊
厨斗に深あるかさり鍋具也 香
芸もせぬ嘉ゝる日も宮の月義 菊
冊の華は湯に誘われてみる 香
乾きたる墨斗に水をたらしぬ 菊
未だ春さくまぬ京の方角 香
字に書け紫俗なる詞も風ゝ 菊
隣の主禅にかたむく 香
懐よ月をかくて松の夢 菊

二ウ 祭前宮の箔きいきらん 香
足てあるけみか肝煎の役 菊
咲きまゝきるの八俵ゝく梅の音 香
まとろむ内に歌を聞よりり 菊
ちの上方も赤さらら花の良 香
揚むるにかをる嫁菜蒲公英

白鷺の立すゝみ乱芳 緑
殘剛は松の亀黒む 遠江 十湖

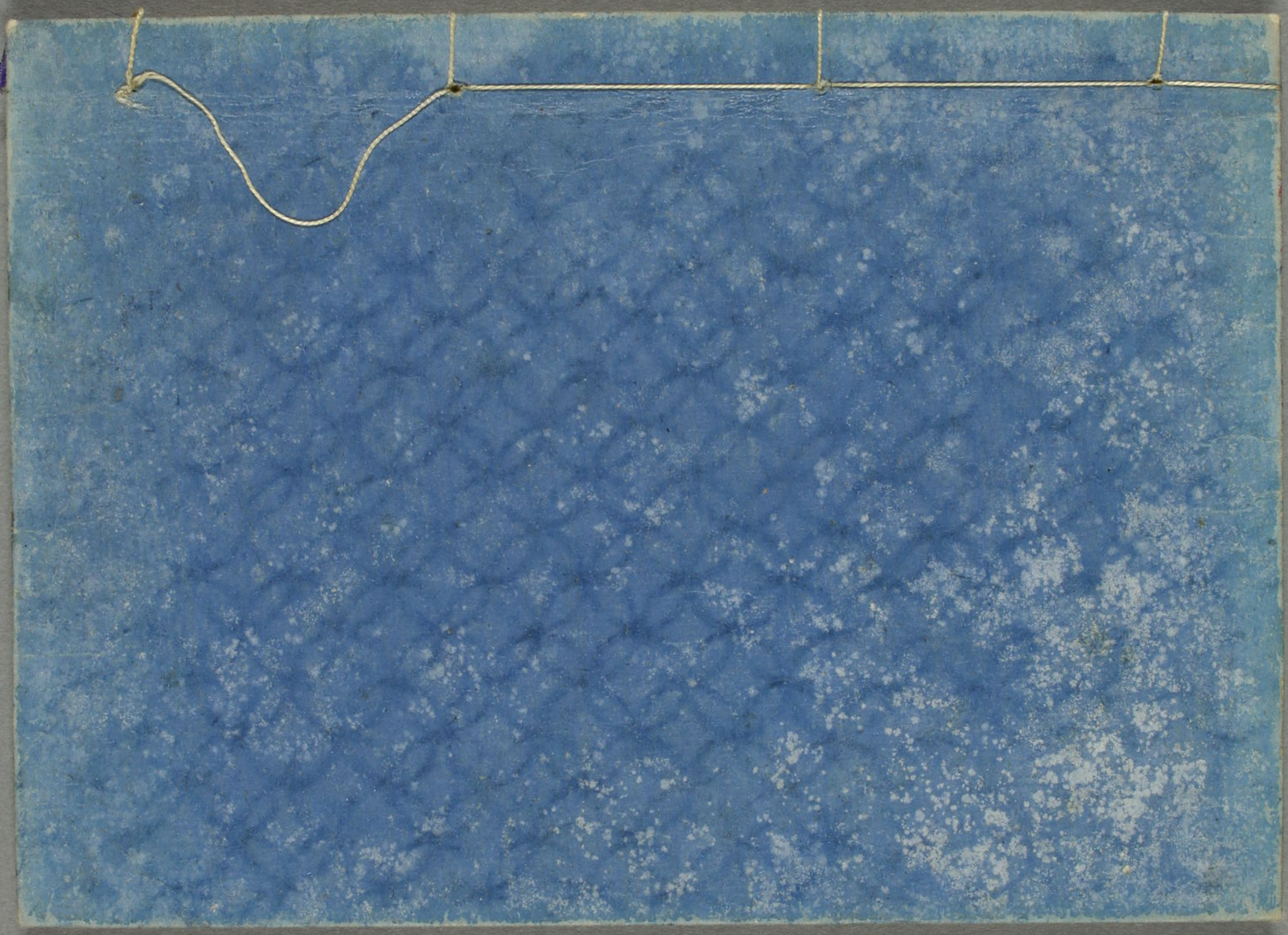
別座敷古き画巻の繙て
こちらも用のある人が来る
洲の天竜になり自足な
ゆく島中かるる小相撲
ウ
厚き中にたのきるも旅の秋
白洲中筆のあやきいるまん
非番にて釣にて悩む酒の量
嫁姑口ハあるうちよろる
室咲にてを色青き不見なく
ふたまる中ゆく弱る月
長老を火まるかまて沢番て
病室を舞を早いのかも

緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多

はゆて形る鯛をてきん地まき
町を宮参よ有繋城ゆた
幕串を伸ふを花の寄なり
室中景色を深る初秋
二才
邸を笑へ雑を笑へよて子煩脳
布袋屋なれ侍知らぬ人を
盗人を追て逃て好意新
鮭料言中膳をかへる
幾風を吹うれて寒其そう
出る八月を今を名斗を
流れゆく年のそめやうなく
悩滞た歩に俳を揺かする

緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多 緒多

小さ広寺おて家樂なる事しかた
ひ祈り殿斗ても付ぬ大切
月もの一栗柿なる歳前り年
日和の第ゝ一白ゝ稲垣

二ウ

大幟立て小宮の里祭
振へたひまる事肩上ゲ
役所から呼に来らるる用ゝの
薩球船ゝ未た着かぬ筈
節ゝれハ傍ゝ子の始ゝはかり
接木するゝ縁の事のため